

## マルクス主義理論史研究の課題 (XVI)

### ——星野中のマルクス主義研究——

太 田 仁 樹

#### はじめに

2008年7月19日、星野中（1937-2008）の生は突然の終末を迎えた。星野は71年の生涯の大半をマルクス主義者と自覚して生きた。20代前半にはマルクス主義的政治運動の中核で活動し、大学院進学後は学問の場でマルクス主義を研究対象とした。その学問的成果は「星野中主要著作リスト」に示されるものであるが、本稿では、[1] から [40] までの執筆活動に見られるマルクス主義に関する星野の言説を検討し、星野の思考の軌跡を彼自身の言葉で再構成し、星野がマルクス主義研究の分野で、後続研究者に何をもたらしたか、どのような課題を残したのか、を考える素材を提供したい。

#### 1 学説史研究以前の時期：[1]

「安保闘争の挫折と、池田内閣の成立」の後、政治活動から身を引いて、研究者の卵として星野が分け入ったのは「宇野経済学」であった。1993年に星野は、そのころの自分を次のように振り返っている。

〈A〉 汚れない「真のマルクス主義」とりわけ経済学を追究することを自分の課題とすることになったわけで、まずは宇野経済学を学ぶことから始まった。全部で八冊からなり、方法論、原理論、帝国主義論をへて世界経済論と日本経済論で締めくくられる『経済学体系』が刊行されつつあった。  
([40] 177)

「真のマルクス主義」を追究するといっても、宇野が最初に取り組んだのは、思想史研究や学説史研究ではなかった。大学院に進学したのちにまず取り組んだテーマは、ドイツ資本市場の形成に関する実証分析であった。その成果は [1] としてあらわれている。

[1] はヒルファディング『金融資本論』を前提としつつ、それを「産業独占の契機の欠如」として批判するという伝統的な立場に沿いつつ、ドイツにおける独占形成のプロセスのなかでの資本市場の形成を明らかにすることを課題とするものであった。この論文は綿密な実証研究でありながら、宇野経済学のいわゆる「三段階論」の要をなす「段階論」の彫琢を意識したものであった。

〈B〉私はそうした原理論に大いに関心をもちながら、大学院でこれを専攻とすることは避けた。応用経済学を専攻し、具体的には帝国主義論にかかわる実証研究を手掛けていた。……歴史的条件をとらえるいわゆる段階論を一般的、抽象的な原理論と現実分析との間に介在させるという、それ自体としては極めて常識的でありながら、ほかではほとんど取り上げられていない方法に魅力を感じたのであった。〔40〕178)

この論文ではヒルファディングをレーニンと対立的に捉え、レーニンの観点からヒルファディングを批判するという通説的立場を受け入れた論理構成になっている。宇野経済学に立ちながらも、ヒルファディング批判の基準としてはレーニンの『帝国主義論』が用いられていたのである。

〈C〉彼（ヒルファディング-太田）の目前に展開した現実の過程においては、株式資本はまさに独占を契機とする巨大資本の激烈な集中・集積の運動を媒介するものとして機能していたのであるが、株式資本=貨幣の視野から、それはたんに貨幣を調達し、たかだかその支配を維持するための効率のよい機構と捉えられたのであって、そのため独占を形成する具体的な集中・集積の運動はたんに与えられた独占という事実に戻したのであった。〔1〕51)

「集中・集積」の運動から切り離して株式資本論を説いている点にヒルファディングの欠陥があるという論点も、レーニンの観点からの批判であり、のちに星野が放棄する議論である。

大学院時代の星野の実証研究は、次の時期の帝国主義に関する学説史研究の前提として、独占成立期のドイツ資本主義に関する自分の認識を確実なものにする意味を持った。ヒルファディングに対する批判的関心は、ドイツの資本市場を問題にするという研究課題の設定にすでに内包されていた。その批判は宇野経済学の立場からなされているのだが、レーニンの立場とも重なるものであった。

## 2. マルクス主義的諸帝国主義論との対質：〔2〕-〔12〕

研究の場を同志社大学、大阪市立大学に移した当時の星野の関心は、帝国主義論に関する日本の論者たちの議論の方法論的検討と、その観点からの古典的帝国主義論の検討であった。

批判の俎上にあがった日本の論者は、大野英二、住谷一彦、熊谷一男、入江節次郎、鈴木鴻一郎などであった。古典的帝国主義論の論者としてはヒルファディングとローザ・ルクセンブルクが対象となった。古典的帝国主義論の検討に際しては、その歴史的文脈、とくにドイツ社会民主党内での修正主義論争との関連に注意が払われている。

この時期の星野の『金融資本論』認識を端的に示すものは、〔3〕である。「『金融資本論』は帝国主義の段階的性格の解明に迫ろうとしたはじめての理論的・体系的な労作として評価されなければならない」（〔3〕258）と高く評価する星野は、『金融資本論』の限界をマルクス・エンゲルスの「基礎視角」の継承であったと言う。

〈D〉ヒルファディングが「社会主義の前提」を考えるにあたってマルクス・エンゲルスから直接ひきついだものは（資本制生産の発展の極を集中・集積の結果としての完全独占の状態に求め、現実の株式会社およびカルテル、トラストをその発展傾向の線上に位置づける）と言う基礎視角であった。……前述の基礎視角にもとづいて「革命の現実的条件」を追求した結果、銀行の支配による資本主義の組織化を説かざるを得なくなったところに『金融資本論』の根本的欠陥をもたらす直接の動機が存在したのである。（〔3〕271-273）

〔1〕においては、ヒルファディングの株式資本論が「集中・集積」の運動と切り離されて説かれている点が「欠陥」とされていた。ここでは「集中・集積」の運動が完全独占をもたらすというマルクス・エンゲルスの基礎視角が、ヒルファディングによって継承されたところに「欠陥」が見出されている。批判の方向は明らかに転換している。この方向転換には、マルクスやエンゲルスだけでなく、レーニンに対する批判も含意されている。「基礎視角」の直接的な継承が問題をひき起こしたのだという指摘であれば、宇野経済学の枠内での批判といえるが、この「基礎視角」をマルクス経済学総体のなかで核心的な意味を持つと考えるなら、この批判はマルクス経済学総体の否定という星野の後の思考を予示しているものとも言えそうである。

マルクスとエンゲルス（そしてレーニン）に対する批判が現れている点で、この論文は注目すべきなのであるが、この時点での星野の宇野経済学への忠誠心は揺らいでいない。鈴木鴻一郎との論争においても、次のようなレトリックでその忠誠心が吐露されている。

〈E〉宇野教授の体系構成においては、帝国主義段階の資本主義にたいする原理論の緊張関係が強く意識され表現されているのであるが、鈴木教授の立論は、しばしばこの緊張関係を無視したり回避したりする方向でなされている（〔7〕145）

「帝国主義段階の資本主義にたいする原理論の緊張関係が強く意識」されているのは、宇野と星野の共通点であるが、鈴木は「この緊張関係」を無視ないし回避しているというのである。

この時期の星野の研究関心においては、ローザ・ルクセンブルクも大きな位置を占めていた。両者は修正主義批判という点で共通するだけでなく、資本主義の終末像という点でも共通点を持つと理解されている。

〈F〉資本主義の終末像は具体的には資本主義の何らかの側面における実体的な完成状態に求められた。ローザ・ルクセンブルクの「世界市場の完成」、ヒルファディングの「金融資本の完成状態」がこれである。一方に「完成」＝「終末」という等式をおき、他方で現実の発展傾向の延長線上の至近距離に資本主義の完成状態を見透すという構図において、帝国主義的諸事象は社会主義への条件の成熟を示すところの、資本主義の最高の発展段階の表象として位置づけられることになる。……「資本主義の完成状態」の想定を軸とした帝国主義把握は、このようにして、対象を資本主

義の特定の段階としてとらえる、経済学独自の一領域の形成へとすすんで行ったのである。([8] 34)

この時期までの星野にとっては、ローザ・ルクセンブルクとヒルファディングとは、同一系列の中の2類型であった、と言ってよい。また「資本主義の最高の発展段階」を表象するという表現は、レーニンの『帝国主義論』を意識したものであろう。ここでの星野の古典的帝国主義論の諸論者に対する態度は、マルクス・エンゲルスの「基礎視角」を継承する点で「欠陥」を内包するものの、帝国主義論という固有の問題領域を自覚しつつある理論的営みで、理論史的には宇野弘蔵によって継承され、やがて止揚される位置を占めている、というものであったと言えよう。レーニンは基準としての位置を失ったが、宇野弘蔵の位置は一層強固に確認されている。

### 3. 帝国主義論における「社会化」論的系譜研究：[13]－[20]

だが[8]の論考は、一回だけで中断した。ルクセンブルクとヒルファディングを並べて論ずることによっては、マルクス主義的帝国主義論史の全体を描くことはできないとの立場へ、星野が移行したからである。新しい立場への移行は、1974年の続稿 [13]－[16] の降旗節雄との論争によってはっきり姿を現す。

〈G〉ここに掲げた拙稿 ([8]－太田) は、ローザ・ルクセンブルクとヒルファディングの帝国主義認識を対比しつつ、その基本的な論理構造における共通点を資本主義の完成論という構成として別出し、私なりに「帝国主義論とは何か」という問題に一定の照射を与えようとしたものであるが、事情により中断して今日に至っている。中断を経て現在では、この点についてやや異なった考えをもつに至った。すなわち、ローザとヒルファディングの苦闘の中に、帝国主義論形成期のもっとも根本的な問題がひそんでいる、という点については、考えのかわるところはないが、ただ、この2人に代表させて論ずることによって、問題をより鮮明にすることはできるとしても、他方で、帝国主義論史の全体の視点としては一面的な議論になるのではないか、という危惧を抱くにいたったのである。([13] 110)

[13]の論考は、降旗節雄『帝国主義論の史的展開』(現代評論社, 1972), 同『帝国主義論の形成』(青木書店, 1973), 同『マルクス経済学の理論構造』(筑摩書房, 1974)において展開された、帝国主義論の「世界資本主義論的系譜」なるシェーマを批判するものである。ここで星野は、降旗のいう「世界資本主義論的系譜」が、帝国主義に関する諸理論の相互関係の理解に何ら資するものではないと断言し、これに代わるものとして、[14]－[16]において「社会化論的系譜」を提起した。星野の言う「社会化論的系譜」はマルクス・エンゲルスに発し、ヒルファディング、ブハーリン、レーニンにつながる系譜である。

〈H〉「金融資本の歴史的傾向」とは「資本制的蓄積の歴史的傾向」の現代版にほかならないのである。／『金融資本論』の第1～第3篇は、基本的に、以上にみたような形で、資本集中ないし集積という基礎視角に貫かれているといえる。同時にそれは、『金融資本論』全体の基礎視角でもある。……ブハーリンがヒルファディングから継承したものは、金融資本概念にかぎられるものではなく、それを支えていた、以上のような基礎視角そのものである。まさに「集積過程」の展開のうちに『近代資本主義』の基本的特質を把握するという観点をブハーリンはヒルファディングからうけついでいるのである。そのかぎりでは、レーニンも同じものを継承しているといつてよい。([14] 25-26)

「社会化論的系譜」の問題点が何処にあるのか？ [14]-[16]の論考では必ずしも明快な説明が与えられてはいない。1986年の概説書の記述([30])は、この系譜に関する星野の総括的見解をが示されている。

〈I〉以上に3人の理論家（ヒルファディング、ブハーリン、レーニン-太田）の帝国主義理解を概観した。「集積」または「独占」のとらえ所に、あるいは「組織化」あるいは「支配と強制」と差はあるが、一方における少数巨大資本の支配拡大、他方にそれ故にひきおこされる衝突——①少数者同士の衝突、および、②少数者と多数者の衝突（いずれの衝突が強調されるかは執筆時の状況による）——という図式を描くことにおいて、3者の基本的方向は一致していたのである。それは景気循環をとおしてあらわれる資本蓄積の複雑なメカニズムを解明することよりも、むしろその結果として生ずる「集積」に焦点をあてることになった。そしてそれは、著者の直接の課題、すなわち①第1次大戦の帝国主義的性格を暴露すること、②資本主義の死滅の近さを説く道具立てを提供すること、には有効であっても、後継者をも含めてマルクス経済学の目を具体的な資本蓄積過程からそらせる役割を果たしたものとおもわれる。([30] 243)

星野にとって、具体的な蓄積過程の分析を阻害するような、「社会化論的系譜」の「基礎視角」、すなわち資本の集中ないし集積というマルクス・エンゲルスとその後継者たちの「基礎視角」にこそ、マルクス経済学の「不毛性」の根源があると見なされるべきなのである。

この時期の星野は、降旗の「世界資本主義論的系譜」を批判する中で、「社会化論的系譜」という帝国主義論の系譜を打ち出すことにより議論をクリアーに展開できるようになった。マルクス、エンゲルス、ヒルファディング、ブハーリン、レーニンという、マルクス経済学の主流を貫く論理を「集積」ないし「独占」に見出し、その系譜が資本蓄積の具体的過程の分析という課題から目をそらしてきたと批判的に論ずることが出来たのである。マルクス以後のマルクス主義者を対象とする研究が、マルクスの「真の」後継者は誰であったのかという、「可能性探し」によって、マルクス主義の救済・延命に向ったのに対して、マルクスの後継者たちの「欠陥」をマルクス自身の論理のなかから理解するという、マルクス主義研究の画期的方法が現れたのである。

だが、『資本論』第1巻第7篇第24章第7節「資本制的蓄積の歴史的傾向」において典型的な形を

見せる、資本の集中・集積から独占の形成という「基礎視角」を「原理論」から排除するとともに、科学とイデオロギーの厳格な区別を主張した宇野経済学は、このような陥穽を免れているのではないか？ この問に対して、降旗との論争期には、星野は必ずしも明確に答えてはいない。

#### 4. マルクスとエンゲルスの農民問題論の検討：[21]－[27]

帝国主義論の系譜論的研究により、マルクス経済学の限界を見極めた星野は、数年の空白の後に、マルクスとエンゲルスの農民問題論の検討に移行した。星野の農民問題論研究は、[21]、[22]、[23]、[26]、[27]で集中的に公表された。

農業・農民問題は晩年のマルクスとエンゲルスの革命論との関わりで、1970年代に多くの論者が取り上げたテーマである。星野は帝国主義論史研究の成果を踏まえて、この問題に立ち向かった。

[22]において、星野は先行する山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』（未来社、1969年）、淡路憲治『マルクスの後進国革命像』（未来社、1971年）、同『西欧革命とマルクス、エンゲルス』（未来社、1981年）、和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房、1975年）を取り上げ、これらの先行業績が第一インタナショナルにおける農業政策論争を無視していることを批判し、自ら[22]と[23]で、この論争を取り上げ分析している。山之内、淡路、和田の三者によれば、マルクスとエンゲルスの農民問題把握は、彼らの思想の円熟とともに深まり、小農民の要求に配慮した「労農同盟論」を発展させた。その最終的到達点は、エンゲルスの『フランスとドイツの農民問題』（1894年）にみられる「労農同盟論」である。星野は、上記三者の研究が、第一インタナショナルにおける農民問題をめぐる論争の分析を欠落させている点で致命的な欠陥があると指摘し、[22]と[23]で集中的にその分析をおこない、(1) 1848年革命期、(2) 第一インタナショナル期、(3) 1890年代の農業綱領論争の時期の三期に分けて、マルクスとエンゲルスの農民問題論を総括した。

彼らの農民問題論は、農民に対する妥協と、プロレタリア革命の原則との間の動揺であった。農民没落論はプロレタリア革命の原則と表裏一体であり、それは『資本論』の生産力論によって支えられていたものであり、この立場に立つ限り、「労農同盟論」は理論的根拠を欠く戦術的配慮以上のものではありえない。

〈J〉一方で農民の資本に対する反抗をも反動的としながら、他方で何の政策的媒介もなしに、農民がプロレタリア革命の同盟軍となることを期待する、というような、1848年革命当時の彼らの農民層を出発点とすれば、その後の彼らはずかではあれ問題をより現実的に捉える方向に前進していたといえることができる。こうした歩みを「反農民→親農民」という単線的な尺度で計ることは理解を混乱させるものでしかない。彼らはくり返し農民の反革命的な行動に直面したが故に、より現実的な対応を考えざるを得なかったのである。政策を媒介とした農民獲得論、そして政策における農民への妥協の容認、これらの到達点は、「農民をそのまま社会主義へ進みうる勢力だと」認める所であったと考えられる。これはたしかに労働（労農—太田）同盟論への接近を意味してもいたのである。もっともその接近とは、より実践的な場にあった社会主義者の、従来からの主張への接

近と別のものではなかった。他面において彼らはプロレタリア革命の原則に忠実であり続けようとした。妥協的政策への神経質な拒否、農業プロレタリアとの同盟論の強調、そして農民没落論の強調などがそのあらわれである。農民没落論は一見原則とは別のものと見えるかも知れない。しかしそうではない。プロレタリア革命の原則はプロレタリアートこそが革命の主体であるとの意識に支えられている。そしてプロレタリアートに人類の将来を託させるこの論理は、中間層没落論（いいかえれば純粋化傾向論）がプロレタリアートを将来の代表者たらしめることによって支えられている。その中心をなす農民没落論は、したがって、経験的事実の問題であるよりも、プロレタリア革命の原則の論理的支柱なのである。（[27] 47）

星野はマルクスとエンゲルスの農民問題論に見られる非理論的な態度の背後には、『資本論』における近代的生産力理解があったと考えている。

〈K〉規模の生産性をほぼ絶対視する『資本論』の近代的生産力理解を以てすれば、小農経済がそうした生産力を生かせないのは自明のことであって、それははじめから没落の宿命を背負った時代遅れの存在でしかない。要するに、この節の叙述にかぎらず『資本論』の全巻を貫いている生産力論自体が小農没落論をいわば内蔵していたのである。農民の没落を生産力論から直接に、既定の事柄として導き、他の諸要因は形態と時間を左右するものでしかないとするようなタイプの議論が、この種の論理から導かれがちであることはいうまでもない。（[27] 24）

農民問題は、マルクスの社会認識（＝資本主義認識）の根本的欠陥を露呈する好個の例として取り上げられているといえよう。小農論の不在や農民層分解論の強固さは、『資本論』的社会認識の限界を露呈するものであり、マルクスとエンゲルスにとって「労農同盟論」とは理論的裏付けをもたない政策的妥協以上のものではなかった。

農民問題論の不十分性を『資本論』的な社会認識の欠陥のあらわれと見る星野の視点は、「社会化論的系譜」研究が『資本論』的な社会発展論（「歴史的傾向」論）の欠陥を暴露するものとなった星野の帝国主義論研究の視点に通底するものであった。

## 5. マルクス経済学全体の批判的考察：[30]－[40]

星野のマルクス主義研究は、実質的には1983年で終わっている。80年代後半の仕事は概説と書評にとどまっている。だが星野の視点の変化はより明瞭になっている。

マクレランの翻訳の書評（1987年）では、マルクス主義の総括の主軸にはマルクス－ロシア・マルクス主義を結ぶ線を置くべきであるとの主張が鮮明になっている。

〈L〉私はマルクス主義の現状を、「多様性」とか「諸マルクス主義」のようにとらえるのは、間違った判断を導くように思う。むしろロシア・マルクス主義を正統として強力に編成されたマルクス主

義が、腐敗または解体の過程にあるというのが実状ではないだろうか。腐っていく食物や解体中の建物は次々と多様な姿をみせはするが、これを食物と建物の多様化と呼ぶ人はまずいないし、いたとしてもさほどの混乱は生じない。思想のばあいには見あやまりやすいし、そのことから実害が生じるのである。もっとも解体中の思想のかけらをひろい、暖め育てることによって、その可能性を見極めていくこと（「多様化」の推進）も、客観的にみれば解体を押し進めているわけで無駄なことではない。とはいえ、解体の、基本的原因を探り、その過程の主要な契機を観察することをめきにしては、それは羅針盤のない航海となるだろう。解体の原因を見極めたとしても、そのことがマルクス主義の再生を可能にするとは限らない。しかしマルクス主義がロシア・マルクス主義の形をとってこの世に生み出した悲惨と、その悲惨が今度はマルクス主義に反作用するさまの、少なくとも概要を知ること怠っては、何主義の形をとろうとも現代に有効な思想は生まれまいだろう。私がくりかえし正統派の位置づけを要求したのはそのためである。（[31] 88-89）

マルクス主義の諸潮流の研究は、「真の」マルクス主義を探り出したり、その可能性を掬いとることを目標にするものではない。むしろ現実に存在したのマルクス主義の否定的な帰結の理論的淵源を探るものであるべきだ、したがってマルクス主義研究の主要な対象は主流派であるべきだという、3の時期に明示的になった姿勢がより明瞭になっている。

このような姿勢の転換は、自らの帝国主義論の系譜論的研究についての反省（1990年）にも現れている。

〈M〉私はマルクス主義的帝国主義論の形成過程を20世紀マルクス主義の主要契機とみなして、これをもっぱら研究対象としたのであるが、当時私なりにこれを客観的にとらえる努力は払っていた。後にやや立入ってのべるように、帝国主義論という領域そのものの存立基盤を問う契機を含んでいた点に私は今でも自分の研究の意義を認めているが、にもかかわらず、帝国主義に関する個々の議論の組み立てを判断するにあたって、基準としたのは私自身がえがく経済学のありうべき体系の諸要素にほかならなかった。そして後者は、主として宇野経済学に依存し、宇野経済学は宇野経済学で、ヒルファディングやレーニンがしいたマルクス経済学の軌道にかなり大胆な整備を加えはしたけれど、けっして軌道をしき直しはしなかった。こうして私は、宇野経済学に安住するかぎりでは、帝国主義論史におけるその自己確認をし、しかし、古典的帝国主義論の存立基盤そのものの不確かさに気付くにつれて、自らの経済学の基盤そのものを破壊するという、分裂的な作業にはいることになった。（[35] 143）

さらに、星野がマルクス主義について述べた最後の論考 [40] では、宇野経済学に対する批判的な姿勢も、明瞭に吐露される。古典的帝国主義論を継承・止揚する位置にあった宇野経済学は、その主流的系譜の難点を克服するものではなく、難点を隠蔽したのである。

〈N〉宇野の帝国主義理解が、基本前提において、無造作にヒルファディングやレーニンのそれを



受け継いでいる点が納得できなかった。ヒルファディング、ブハーリン、レーニンというマルクス主義的帝国主義論の主流は、資本の巨大化と集中、独占形成などを、エンゲルスにしたがって「社会化」の進展という観点でとらえることを軸に帝国主義理解を構成していた（これを私は「『社会化』論的系譜」と命名した）。……宇野経済学はその基本構成において陰性の崩壊論を内在させていたのであった。（〔40〕 179）

宇野経済学はこのような形で「崩壊論」を内在させていたがゆえに、「原理論」・「段階論」・「現状分析」という方法論的三段階論も学問的に豊かな成果をもたらすこともなかった。

〈O〉段階論ないし帝国主義論が日本資本主義の具体的な分析のツールとして有効に機能した例を私は見いだせません。資本主義の歴史的発展の中でみられる構造的変化を後付けることそれ自体は有効な方法で、したがって何らかの意味で段階論的なものが必要であることは認めますが、帝国主義論は、宇野のそれを含めて、理論構造の中軸に資本主義の間近な崩壊を予定しています。こうした主観的な理論構造を根本的に清算しないかぎり分析のツールにはなりようがありません。（〔38〕 11）

また、宇野経済学のいう「科学とイデオロギー」の峻別も実質的に空洞化していた、と星野は指摘する。

〈P〉政治、ないしは政治組織からの学問の自立という点でも、宇野はマルクス主義にはめずらしく明確な主張をもっていた。しかし自分がてがけた領域そのものの政治的性格を批判的に検討する必要には、ついに気付くことがなかった。ようするに、スターリン的政治主義にすどく反応した宇野も、より深くマルクス主義に根ざした政治主義、すなわちそれが「科学的社会主義」を自称していることにもとづく政治主義に対してはほとんど無防備であった、ということである。ところが、私にとってはこれらの点こそ、マルクス経済学の内部ではどうにも解決できない問題点なのであった。（〔40〕 181, 74）

星野の帝国主義論の系譜論的研究は、マルクス経済学の致命的「不毛性」の発見に導き、同時に宇野経済学によるマルクス経済学の「再生」の「不可能性」（＝「どうにも解決できない問題点」）の自覚に導いたのである。

宇野経済学とマルクス経済学に対して距離を持つようになった星野にとって、講座派の論客である山田盛太郎や平野義太郎の所説も、単なる謬説として片付けられるものではなくなった。1992年の論考では、むしろ問題点を内包するが故に真剣に検討に値する対象として、宇野よりも重要な位置が与えられるようになる。

〈Q〉結果としてみると、山田も平野も、半封建的農業の位置付けにあたって、唯物史観公式ないし社会構成体論との折れ合いに相当苦勞していることが明瞭です。私の立場からすると、どちらもとても歯切れが悪いところが不満ですが、山田が段階のニュアンスを加味した類型論に、平野が「社会」を独自の領域としてあつかう方向に、それぞれ手掛かりを残していることが、日本資本主義論争の、軽視出来ない成果だと思います。([38] 10)

宇野派の段階論や帝国主義論が日本資本主義分析の具体的成果をもたらさなかったと評しているのに対し、山田や平野の仕事を「成果」と評していることに注目すべきであろう。

スターリン批判以後の日本のマルクス主義研究の非正統的潮流は、マルクス主義のなかの非スターリン的な諸傾向を掬いとりとることと、マルクスのなかの非スターリン的な諸側面を掬いとりとることを課題としていた。宇野経済学もそのような流れに棹さすことで論壇と学界に一定の地位を確保してきた。宇野経済学のただ中から出発した星野の研究は、このような日本のマルクス主義研究の方向とは丁度逆方向を向いている。彼は「マルクス主義がロシア・マルクス主義の形をとってこの世に生み出した悲惨と、その悲惨が今度はマルクス主義に反作用するさま」をマルクス主義の主流派とマルクス・エンゲルスの言説を内在的に検討することで明らかにしたのである。

〈R〉そこではマルクス主義の、あるいはそれがもたらす事態の、すべての不都合はロシア・マルクス主義に着せられ、浄化された残部が自分のマルクス主義にとっておかれる。ちょうどすべての不都合を裏切り者とスパイのせいにしたソ連政治のやり口とよく似たこの作法は、非正統マルクス主義者の習性となっている。私の場合、マルクス主義の可能性をもとめていた期間の九九%はこのような立場にあった。そこからの脱却は、マルクス主義の本質的部分に、ロシア・マルクス主義に集中的にあらわれたようなものへとつながる要素を認めたことによる。([40] 175)

ロシア・マルクス主義はマルクスを裏切っていないし、マルクスの思考から逸脱していることもない。彼らはマルクスの思想が現実化されたときには、いかなる形を取るのかを可視化してくれたのである。

### おわりに：星野のマルクス主義研究の軌跡とその意味

1993年の時点で、星野はマルクス主義研究を継続する意思を語っている。

〈S〉批判的なスタンスをとりながら、しかし私はマルクス主義とのつきあいをやめてはいないし、おそらく生涯つきあい続けるだろう。それは、思想には、それが人々をひきつけて変革を起こさせる力をうしなった後にも、ある役割が——適当な表現ではないかもしれないが、いわば後片付けのような役割が——残されていると考えるからである。……古い思想の総括がそのまま新しい思想の形成につながるということはまず考えられない。しかしそれが健康に育つための土壌には、古い

思想の精確な総括が不可欠なのである。([40] 173-174)

しかし、1996年滞欧中に「狂牛病騒動」に遭遇した星野は、以後の研究活動をBSE関連のものに限定している。そこでは古い思想（マルクス主義）の総括がどのように、新しい研究分野の研究に活かされているのかは不明である。

「可能性を探る」立場からの脱却は、星野が思想史研究本来の道の出発点にたどりついたことを示している。だが、星野は同時期に帝国主義論研究に従事した多くの論者の中にも賛同者を見出せなかったようである。思想史研究や学説史研究一般において、「可能性を探る」のではない研究は如何にして「可能」なのか、星野自身が「可能性を探る」のではない思想史研究の成果を産み出していないことは、このような研究の困難さを示しているといえよう。だが「可能性を探る」ことに安住した「研究」の不毛性は、星野のマルクス主義研究によって明らかにされたのである。

#### 【星野中主要著作リスト】

- [1] ドイツ資本市場の分析、『東京大学経済学研究』（東京大学大学院）5, 1965
- [2] ドイツ帝国主義の類型的把握：大野・住谷両氏および熊谷氏の所説の検討、『社会科学』（同志社大学人文科学研究所）2 (1), 1967/4
- [3] ヒルファディング『金融資本論』の基本構造とその問題点、内田・小林編『資本主義の思想構造』岩波書店、1968、所収
- [4] 「帝国主義論体系化」とマルクス経済学の体系性：入江節次郎著『帝国主義論序説』によせて、『社会科学』2 (3・4), 1968/3
- [5] 段階論としての帝国主義論、同志社大学人文科学研究所編『帝国主義論の方法：諸理論の分析と展望』（『社会科学』別冊）、1969/3
- [6] 「ノイエ・ツァイト」誌におけるR. ヒルファディングー1ー、『経済学雑誌』（大阪市立大学）61 (5), 1969/11
- [7] 原理論はいかにして「帝国主義論の方法」たりうるか：再び鈴木鴻一郎教授に、『経済学論集』（東京大学）35 (4), 1970/1
- [8] 帝国主義と資本制生産の歴史性：ドイツ社会民主党における帝国主義認識の側面ー1ー、『経済学雑誌』63 (4), 1970/10
- [9] 帝国主義と資本制生産の歴史性：ローザ・ルクセンブルク『社会改良か革命か』を中心に、武田隆夫・遠藤湘吉・大内力編『資本論と帝国主義論（下）』東京大学出版会、1971/2、所収
- [10] マルクス経済学の発展、杉原四郎・真実一男編『経済学形成史』ミネルヴァ書房、1971、所収
- [11] ローザ・ルクセンブルク、鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』青林書院新社、1972、所収
- [12] 『帝国主義研究Ⅰ 帝国主義論の方法』入江節次郎との共編著、御茶の水書房、1973
- [13] 帝国主義論史における継承と飛躍：隆旗説における「世界資本主義論的系譜」を中心に、『経済学雑誌』71 (6), 1974/12
- [14] 帝国主義論史における「社会化」論的系譜：隆旗氏の所説をめぐってー1ー、『経済学雑誌』72 (2), 1975/2
- [15] 帝国主義論史における「社会化」論的系譜：隆旗氏の所説をめぐってー2ー、『経済学雑誌』72 (3), 1975/3
- [16] 帝国主義論史における「社会化」論的系譜：隆旗氏の所説をめぐってー3ー、『経済学雑誌』73 (1), 1975/6
- [17] 『帝国主義研究Ⅱ 帝国主義の古典的学説』入江節次郎との共編著、御茶の水書房、1977
- [18] 修正主義論争、佐藤金三郎・岡崎栄松・隆旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶⅡ 第一巻・資本の生産過程（下）』有斐閣、1977、所収
- [19] 「集積」と「集中」の用語法：「資本論」第3巻（草稿および現行版）の検討資料ー1ー、『経済学雑誌』79 (2), 1978/11
- [20] 「集積」と「集中」の用語法：「資本論」第3巻（草稿および現行版）の検討資料ー2ー、『経済学雑誌』79 (3),

1979/1

- [21] エンゲルスと「労農同盟」, 『経済学雑誌』 82(6), 1982/3
- [22] 第一インターナショナルと農民問題-1-: 続・エンゲルスと「労農同盟」, 『経済学雑誌』 83(1), 1982/05
- [23] 第一インターナショナルと農民問題-2-: 続・エンゲルスと「労働同盟」, 『経済学雑誌』 83(2), 1982/7
- [24] 廣松渉・片岡啓治編・解説『マルクス・エンゲルスの革命論』に寄せて, 『週刊読書人』 1461, 1982/12/13
- [25] 資本主義世界の歴史と論理, 『経済学雑誌』 84(別冊), 1983/4
- [26] マルクス, エンゲルスと農民-1-, 『経済学雑誌』 84(2), 1983/07
- [27] マルクス, エンゲルスと農民-2-, 『経済学雑誌』 84(3), 1983/9
- [28] 資本主義世界の論理, 『経済学雑誌』 85(別冊), 1984/4
- [29] 現代資本主義論: 戦後世界経済概観, 『経済学雑誌』 87(別冊 2), 1986/4
- [30] マルクス経済学(2), 小林昇・杉原四郎編『新版 経済学史』有斐閣, 1986, 所収
- [31] 「アフター・マルクス」D. マクレラン著, 重田, 松岡, 若森, 小池訳, 『経済学雑誌』 88(1), 1987/5
- [32] “Export pessimism in Inter-War Japan: A Comment on ‘Views on Economic Crisis, International Economic Relations, and Trade Policy in Inter-War Germany’ by Dr. Landesmann” 『経済学雑誌』 88(2・3), 1987
- [33] 現代資本主義論・資料編(現代資本主義論), 『経済学雑誌』 89(別冊 2), 1988/4
- [34] 〈書評〉上条勇著『ヒルファディングと現代資本主義: 社会化・組織資本主義・ファシズム』, 『経済学雑誌』 89(3・4), 1988/11
- [35] 崩壊論と帝国主義論: ローザ・ルクセンブルグ——帝国主義論史・再考(1)——, 『経済学雑誌』 90(5・6), 1990/3
- [36] ヒルファディングの株式会社論, 『証券経済研究』 5, 1990
- [37] 経済史と発展段階説(専門基礎科学・経済史), 『経済学雑誌』 92(別冊), 1991/4
- [38] 資本主義分析とマルクス主義歴史理論の役割: 日・韓資本主義論争において考える, 『経済学雑誌』 93(3・4), 1992
- [39] 歴史としてのマルクス主義(マルクス主義のバランスシートⅢ), 『思想の科学』 通号 153, 1992/6
- [40] マルクス経済学: 私なりの総括(マルクス経済学とは何であったか), 『経済評論』 42(5), 1993/5
- [41] 欧州単一通貨と“Beef War”, 『経済学雑誌』 97号(別冊), 1996
- [42] 狂牛病紛争 1996-98: EU-UK 関係の一齣, 『経済学雑誌』 99(3/4), 1998/11
- [43] 「狂牛病」紛争の起点: 英国-欧州連合関係の視点から, 『金沢経済大学論集』 33(2), 1999/12
- [44] 地域統合と家畜疫病: 狂牛病・口蹄疫パニックと EU 農業政策, 『金沢経済大学論集』 35(1), 2001/7
- [45] 日本の「狂牛病」パニック: 報道, 行政と業界のあり方, 『金沢経済大学論集』 35(3), 2002/3
- [46] 「狂牛病」行政の検証: BSE 調査検討委員会報告とメディアの論評, 『金沢星稜大学論集』 36(1), 2002/7
- [47] ヨーロッパ社会の BSE 対応, 『金沢星稜大学経済研究所年報』 (23), 2003/3
- [48] 「狂牛病」対応と食肉流通問題: 検討委員会の第三者性を問う, 『金沢星稜大学論集』 37(2), 2003/12
- [49] 東アジア FTA 熱と経済取引: 予備的考察, 『金沢星稜大学経済研究所年報』 (25), 2005/3
- [50] なぜ「狂牛病」は世界に広がったのか?, 金沢星稜大学地域連携センター編『地域の経済と情報への視線』桂書房, 2005年, 所収
- [51] 「狂牛病」問題の社会科学を!, 『学会会報』 2006(1), 2006/1
- [52] 日本と EU の BSE 検査実績: 比較研究, 『金沢星稜大学論集』 40(3), 2007/3

[本稿は、2010年11月27日(土)に大阪学院大学でおこなわれた経済学史学会関西部会第159回例会での報告「星野中のマルクス主義研究」を文章化したものである。関西部会例会において御質問をいただいた保住敏彦氏と小林純氏に感謝を捧げる。]